要救助者の位置は･･･（1995 年 3 月号掲載･時本　修）

地震発生後、バイクでたるみの自宅から急いで職場に向かった。途中、東に向かうにつれ、道路は亀裂が走り、交通機関はマヒ状態、あちらこちらで倒壊した建物が見えてきた。しかも、朝だというのに、空はどんよりとした黒い雲のような煙に一面覆われている。この煙はどうやら、長田区の方から上がっているようだった。

こうした光景を見るにつけ、初めて今回の地震の凄さを知った。というのは地震直後、自宅周辺では大きな揺れを感じただけで、家の倒壊や火災等の異常が見受けられなかったため、市内ではあまり大した被害は出ていないと思っていたのである。

何とかして、署に着いたが、望楼が落ちているのを見て、びっくりした。とにかく、一刻も早く現場へと思うが、すでに全車両は現場へ出動しており、急遽私と福島増男司令補、そして 1 係の隊員 2 名の計 4 名で署救助隊を編成し、徒歩で各現場に向かうことにした。

まず、11 時頃、「磯上通 2 丁目の団地の 1 階に男性が閉じ込められている」との指令が入った。

現場に着くと、鉄筋コンクリート造 5 階建てのビルの 1 階が倒壊しており、中に男性 1 名が取り残されているとのこと。すでに関係者により、2 階の窓には梯子が架けられており、そこから進入して 1 階に降りてみると、途中 5 メートルの所に頭を上に海老ぞりの状態で男性が両足を挟まれていた。挟まれている両足部分にはスペースはなく、救出活動はかなり困難に思えた。

そこで、広報車で運んできた資機材を用いて、左足の救出にとりかかった。膝より下が厚さ 1 センチくらいのコンパネに上部から抑えつけられていたために、ストロークでコンパネを切断した。

次に右足であるが、左足同様、膝より下が挟まれているが、挟まれの状態がハッキリと把握できないため、瓦礫を取り除くことにした。コンビツールや電動ソー、トップアントビ、のこぎり等を用途に応じて使い分け、右足付近のスペースを少しずつ開けていき、海老ぞりになっている体位をずらしながら、救出に当たった。そして、約 3 時間が経過した、午後 2 時に無事男性を救出した。

しかし、その後もホッとする間もなく、エレベーターでの救出現場や火災現場などに向かった。

そして、翌 18 日の午後 2 時頃、署からすぐ近くの、日暮通 1 丁目のビルが倒壊し、数人が生き埋めになっているとの通報が入った。

直ちに現場に駆けつけると、鉄筋造 4 階建のビルが全壊しており、すでに救急隊と他都市の救助隊、警察官、自衛隊職員 50～60 名が救出活動に当たっていた。

外部からの呼び掛けに対し、2 箇所から応答があり、うち 1 名の男性は北西角の比較的浅い所に閉じ込められていた。早速、救急隊や救助隊らと協力し、手で瓦礫を取り除いた後、チェーンソーを用いてコンパネを切断し、無地救出した。

しかし、もう一人の女性は応答はあったものの、かなり遠くからの応答で、場所を確認するのに、かなりの時間を要した。最終的には、声の聞こえる 2 方向からある程度の位置を決め、上と横からの救出活動に当たった。

しかし、上からの救出はコンクリートや鉄板、木材 H 型鋼等が重なっており、困難を極めた。また、作業スペースをかなり広くとっていたが、作業が進むにつれて掘り出した瓦礫等によりスペースがかなり狭くなっていた。

一方、横からの救出は最初順調に進んでいたが、途中 H 型鋼が絡み合うなど作業中止を余儀なくされ、結局断念した。

このような困難な救出活動にもかかわらず、消防隊や警察官、自衛隊等のチームワークにより、翌朝 4 時に無事女性を救出した。活動を始めてから、まさに 14 時間もの救出活動であった。

最後に今回のような救出活動では、消防隊や警察官、自衛隊等によるチームワークが有効に発揮され、また人海戦術も役立ったのではないかと思う。